

松本清張
彩り河
上



文春文庫

106—69

彩り 河(上)

定価はカバーに
表示してあります

1986年7月25日 第1刷

著者 松本清張

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 千102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16 710669-8

入春文庫

江苏工业学院图书馆

藏(书)章

松本清張



文藝春秋

彩り河上・目次

首都高速料金所	9	刺戟	111
女の家	18	ママのお休み	121
「ムアン」の店	27	自殺未遂の家	132
仕打ち	37	家政婦は語る	142
車の誘導人	46	「原田」の仕事	152
夜の開発部長	55	特殊借入金ナシ	162
ホテルの朝食で	64	柿の木坂の病院	172
仮の姿	73	含み資産	182
絢爛たるパーティ	82	「小史」と甲州行	192
宴会場にて	91	「隠れ湯」の里	202
寂しき会長	101	「寿永開発」	211

接待	220
「クラブ・たまも」	231
かいま見	242
自問の胸	252
取材者の立場	262
会長の末路	271
狂騒劇場の中で	281
放火	291
陰影	301
階上席の睡り女	311
捜査のはじまり	322

「ムアン」の店で	331
死者の家	341
匿名の通報	351
丹波山の首縊り人	360
東洋商産、倒産す	369
登記簿の怪	378
一つの構図	388
いろいろごと	399
同乗の女	410
金儲けの構想	420

彩り河
上

首都高速料金所

五月十六日の夜九時ごろである。この時刻、首都高速道路路霞かすみが関料金所せきは中だるみといった状態である。十時半になると、料金所は乗用車で混み合いはじめ、十一時から一時までが混雑のピークとなる。銀座のナイトクラブ、キャバレー、バー、飲み屋などの客が帰宅するころだった。

ラッシュになると、料金所の入口に車が無秩序に殺到する。ここにはブースと呼ばれる赤塗りの、細長い、ちょうど列車の車輛のような通行券授受施設が四つある。内回り線に二つ、外回り線に二つ。そのいずれも全開となる。車の群れは南の官庁街の坂道を上ってくるのと、西南の虎ノ門方面からくるのと、西の赤坂方面の道を上ってくるのと、さらに東の有楽町方面から国会議事堂前を回ってくるのとがある。車の四つの川がゲートの前で合流して溜まり、洪水のようになる。ドライバーたちは一秒でも早く料金所の前に近づこうとひしめき合う。その前方がトンネルに入る下り坂となつていたので、あたかも狭い下水管の入口に溢あふれた水が少しづつ奥へ吸いこまれて行くぐあいだった。料金所の年とつた係員がてんでこ舞いする時間帯である。

それが二時間後にせまっていた。ゲートを通過する車がしだいに増えていたが、まだ列をつくるほどでもなかった。係員たちは、坂下に遠くひろがる街の灯と、夜空に黒々とそびえる議事堂前の木立の藪くさを浮かした外灯を眺める余裕が十分にあった。

井川正治郎は内回り線ブースの赤い箱の一つにいた。事実、これは車輛といつていい。ほぼ三

分の一に仕切った前方が料金徴収の実務室で、後方三分の二にロッカー、着替え室、湯沸かし場、トイレなどが付く。その横がせまい通路になっているのも、車輛製造会社が寝台車の要領で製作したと想像できる。普通はブース一つに定員二名の係が詰めている。

窓口立つ一人は回数通行券の一枚をドライバーから受けとる役だった。現金を出す乗用車には四百円と引きかえに領収券一枚を手渡す。新たに回数券を求める客には繰込みの一冊を渡す。横には計算係が机の前に坐っている。机の上には剩り銭が用意してあって、客が出す一万円札、五千円札、千円札に依じて即座に支払いが出来るように区分し積まれていた。窓口立つ者を「立ち番」、計算係を「坐り番」と云い慣わしていた。「立ち番」と「坐り番」は三十分交替だった。「坐り番」の机の中にも剩り銭の準備がしてあった。午前八時の勤務開始前に会社から現金が渡されている。係は二十四時間勤務で、朝八時から翌朝八時までだった。交替はそのときで、下番した者はその泊り明けの日と翌日が公休となっている。三日目の午前八時の出勤には、また別な料金所に配置される。こういう勤務の回転ローテーションであった。

料金所の係員は首都高速道路公団に直屬しているのではなかった。彼らが所屬しているのは、その業務を公団から請負っている民間会社で、これは十三社あった。一社について料金所をそれぞれ八つか九つくらい担当していた。したがって一社の係員が料金所の勤務を一巡するには二十四日か二十七日くらいかかる。

井川正治郎は、一年前にその委託会社の一つに応募して採用された。

勤務員は会社を定年で退職した年配の人々ばかりだった。仕事は老人むきだ。初任給十三万円、昇給して月額平均十八万円になる。ボーナスは年間五十三、四万円である。年寄りの再就職には優遇のほうだ。

採用にあたっては本人が資性温厚であることと、身元が確実であることが条件である。五十五歳以上だとたいい温和になっている。人生に対する「諦め」に近い。圭角かどはとれている。再就職にあたっては、「家でぶらぶら遊んでいても退屈で仕方がない」「少しでも身体を動かしていい」と老化がすすむ」「まだ心身ともに若い。もっと働きたい」「自分の小遣い銭ぐらいは自分でかせぎたい」「老後の再就職にしては仕事が楽だし、外聞も悪くないから」というのが応募者のほとんどの理由であった。

井川正治郎の履歴書を見て、審査にあたる会社の人事課長は彼にきいた。

「五十六歳ですね。京都大学経済学部卒。ほう、五十歳で東洋商産株式会社の取締役兼管理部長をお辞めになっていますね。東洋商産といえば一流の会社じゃありませんか。どうしてお辞めになったんですか」

「一身上の都合です。具体的にいえば、たとえ役員にさせてもらっても会社勤めを続けるよりは自分で仕事をしたくなったのです。それに、わたしの才能からしても、東洋商産で常務になるような希望もありませんから。五十五を過ぎて、ヒラトリ（平取締役）のまま解任されるよりも、思いきって自分の会社をつくりたくなったのです」

「一年後に大阪で貿易関係の会社をつくられていますね」

「わたしはそこに書いてあるように兵庫県の生れで、大阪に知人が多いのです。京大に入ったのもそのためです」

「で、その会社を三年で解散されていますね」

「やはり見通しが甘かったのです。大きな組織にいるのと、外へ出て独力でやっているのでは万事が大違いでした。それで東京に妻と共に引き揚げました。二年間遊びました」

「料金所勤務ははたで見ると楽ではありませんよ。三日に一回が二十四時間勤務ですからね。隠居仕事と思われたら大間違いです」

人事課長は、六十歳には見える井川正治郎の顔を眺めた。

「わたしはこれでも健康には自信があります。毎朝一時間はジョギングをしています。わたしの家は中央線の国分寺ですから、府中街道を走っています。三日に一度の二十四時間勤務ぐらいはちゃんと出来ます。まだ隠居の心境ではありません。深夜には、仮眠もあるのでしょうか？」

井川正治郎は背骨を立てるようにして云った。

「交替で仮眠が五時間ほどできます」

「それなら大丈夫です。勤務あけの二日間は休みですからね。いまのように家でぶらぶらしている状態では、精神も身体もいかれてしまいます。ぜひ働かせてください」

井川は、再就職志望者のだれもが云うようなことを述べた。

「しかし、東洋商産のような会社の重役さんをご自分からお辞めになったのは惜しいですな」
人事課長は井川の履歴書にもう一度眼を落して云った。

井川はすぐには答えられなかった。人事課長の表情には、井川がその一流会社を自発的に退社したのは、社内の派閥争いに敗れたのではないかという推測が浮んでいた。常務になれる見込みがないと洩らした彼の一言がその暗示になっている。事実は、そのとおりであった。

「料金所の勤務員には、大企業の幹部だった人や、部長クラスだった人が居られます。新聞記者や役人だった人なども居りますよ」

人事課長は、それらの人たちの経歴からも井川を察していた。

「なかには過去の栄光をひけらかす人がないでもありません。それは困るのです。ここに入られ

たら、まあ昔の軍隊と同じでしてね。以前の社会的地位はないことにして、無心で働いて下さい」

わたしは敗残者です、と口から出かかったのを井川は云い直した。

「以前のことはみんなもう記憶から消えています。ここの定年は六十歳でしたね。あと四年は十分に勤められますよ」

「定年は六十歳ですが、健康な方は六十五歳まで延長できますよ」

入社後の二週間ほどは研修期間だった。それが済むと各料金所に順々と配置されるローティションに組み入れられた。

車の通行が激しい料金所のブースは大型で、わりあい閑散な料金所のそれは小型になっている。勤務員たちは大型のを「巡洋艦」と呼び、小型を「駆逐艦」と称していた。軍隊経験者が多いので、そういう呼称を使っていた。人事課長が「ここに入ったら軍隊と同じで、前歴を忘れ、みんな平等だと思いたくない」と云った言葉に思いあつた。

勤めはじめて分ったことだが、勤務者はいずれもある意味で和気あいあいとしていた。というのは、だれもが年とつての二度の勤めという同じ境遇からくる親近感があるからであった。もう浮世の欲も得も捨てている。家に蟄居する退屈脱れと自分の健康のためと割り切ってしまうえば、同僚間の競争も何もなかった。ここでは出世の道もない。ましてや派閥も存在しない。

が、この近親的な「団結」も、一皮むけばお互いが自分の境遇そのものを相手に見ているように、自己嫌悪に陥りやすく、深い交際にはなれないのである。友情はブースの中だけであって、外に出ればそれが消えてしまうような状態であった。いふなれば彼らの間は至極淡々としていた。雑談といえ、当り障りのないものに限られていた。軍隊経験者は、陸軍ならば大陸の戦場や

インパール作戦の戦場を語った。海軍ならば東南海域の戦場やラバウル基地の話などをした。みんな部分的な話で、笑い声は伴わなかった。青春は悲惨な埋没の中にあつた。

「ありがとうございます」

「ご苦労さまです」

窓口の「立ち番」は通行券を受けとるたびにドライバーに云う。直接に客に接するだけに、丁寧に、と教育されていた。

トラックの運転席は、窓口と同じ高さとなって運転手の顔と対い合う位置になる。大型トラックだと見上げるようになる。乗用車の運転席は低いからこちらから見下ろすようになる。井川の経験だが、ドライバーは通行券を握った手を窓口へむかつて突き出すだけで、徴収員の顔を見ようとしなかった。現金を出して領収券や回数券と剩り銭を受けとるときも同じであつた。一秒も早く料金所の前を通過したい運転者の心理もあつたが、こちらが制帽・制服という機械的な人間だからである。鉄道員、郵便配達人、警官、ホテルのボーイなどと同じに制服に人間の存在がかくれていた。いわば「見えざる人間」であつた。

そのため、車に乗った友だちも、近所の人もこちらの姿に気がつかなかった。帽子の底が眉の上まで蔽い、頭髮のぐあいも額の特徴も隠されている。顔の上が無ければ、消えたのにひとしい。制服がさらに姿を隠している。それと、料金所に勤めていることを知らないのが多いから、まさかそこに居るとは考えてもいないのである。

この無機物ともいえる存在の虚しさはやはり侘しかった。仕事も自動販売機のように単調である。過去が終り、諦めの中に静かに生きているとはいえ、心の空虚はどうしようもなかった。

それを埋めるために、同僚の一人は語学を勉強しはじめた。活用する目的ではなく、自分の心

を充たすためだった。ロンドン・タイムズが読めるほど英語をマスターし、フランス語、ドイツ語、スペイン語を克服した。ある者は哲学の勉強をしている。ある同僚は漢籍と取り組んでいる。「史記」「論語」「淮南子」「文選」にまで及んでいる。それが井川の今夜の同僚中田であった。中田は制帽を脱ぐと、尖った頭がきれいに禿げ上がっていた。そうした勉強は、すべて彼らの心の支えであった。口では、頭の訓練が脳の老化を防ぐと云っていた。

——午後九時の霞が関料金所である。

井川は内回り線のブースについて「立ち番」であった。内回り線は芝、飯倉、渋谷方面につながる。午後五時を過ぎると、この料金所の忙しさに備えて、二ブースの定員三名が二名増員されて五名になる。二名は七時ごろから仮眠所のベッドで五時間の仮眠に入っていた。この順番はお互いの話合いで決められる。

「坐り番」は中田であった。

一分間に三台の車が通過した。ラッシュにはまだ時間があった。「ありがとごさいます」「ご苦労さま」と云える余裕はあった。忙しければ無言のうなずきになる。

白い乗用車のあとから赤い車がきた。国産車だが、外車なみの値段に近い高級車だった。運転席には女がすわり、横に男が乗っていた。女は濃いサングラスをかけ、派手な色の洋装だった。

料金所の前で停まって、窓口へ一万円札を握った手をまっすぐに伸ばした。一方の手はハンドルにかけている。

「九回券をちょうだい」

どの運転者もそうであるように、彼女は徴収員には一瞥もくれず、まっすぐに前方を睨んだままであった。こちらからは車の窓を見下ろす位置だった。